

房総丘陵元清澄山地区におけるニホンザル野生群の分布と生態

福田喜八郎(東大・農)

仲 真 悟(東農工大・農)

上原 重男(京大・理)

1976年の房総丘陵元清澄山地区におけるニホンザル野生群の調査は、7月14日～7月22日・12月18日～12月27日の両期間におこなわれた直接観察と聞き込みによって、断片的ながら群れの動きが把握されたので報告する。

7月の調査では、群れは小屋ノ沢・通称見はらし岩・瀬場沢の3ヶ所をそれぞれ遊動しているところが観察されたが、みな短時間の観察で、夏季の群れの観察の困難さを再確認させられた。また当初予定された連日の取り囲み法による調査も、実行できなかった。

小屋ノ沢を遊動していた群れが、遅く伐採跡地にその姿を現わしたので、群れの一部をカウントすることができた。この群れは、幅200mぐらいに広がって移動していたが、そのうち視界の効く斜面にいたサルは66頭であった。死角になっている斜面に何頭ぐらいのサルがいるのか知るために、群れの中に突入してカウントを試みたが、クモの子を散らしたように走るサルの動きに、とうていカウントし切れなかったが、餌場で見られる群れの集合状態の感触から、上記66頭以外に100頭以上のサルがいることを確信した。従来元清澄山地区における群れのカウント例は、最大で48頭であり、高岩山地区に比べて群れのサイズは小さいと思われていたが、この観察によって元清澄山地区にも150頭を越える個体数を有する群れがあるという新発見が得られた。

12月の調査では、郷台のクスノキ林に集中している群れと、相ノ沢から林道を横断して東ノ沢へ移動する群れが観察された。また聞き込み調査では、折木沢や黒滝で頻りに群が見られるという1974年以来の秋季から冬季の傾向が今年もみられた。

屋久島における野生ニホンザルの生態学的研究

片山 一道(大阪医大・法医)

増井 憲一(京大・理)

黒木 一夫(九大・理)

福田 史夫(マカク研究会)

丸橋 珠樹(京大・霊長研)

屋久島の照葉樹林帯にヤクザルが多数群連統して自然分布する地域で、1. 各群の年令・性構成を把握して、1974年以来の資料の蓄積とあわせて、地域個体群レベルの、人口動態をとらえること、2. 地域個体群を構成す

る隣接群間での群れ生活の相違と群間関係を調べることを主な目的とした。

調査は、国割岳西斜面で、7/16～8/4まで20日間延べ14人が参加して行なわれた。

本地域の群れの分布は1975年度までの調査で明らかとなっており、ほぼ再確認された。半山を中心とする3群ではかなり正確な年令・性構成をとらえられ、他に2群、不十分ではあるが部分的カウントが記録された。

28種、33種部位の植物性食物が記録された。主要食物4種の変化をみると、イヌビワは調査期間間を通じてよく利用され、アオモジは7月末に急に利用されなくなり、8月初めに熟し始めたアコウらにサルがつき始めると全く利用されなくなった。また7月末よりアカメガシワが熟し始め、8月に入ると主要食物の地位を占めるようになった。食物の中で、*Ficus* 属の占める割合が非常に高いことが特色の一つである。

工事場群と半山群が共通して利用する地域があり、この2群間で重複地域の土地利用に相違があることが明らかとなった。しかし2群間の出会いは観察できなかった。

サブグループング現象については、社会的性比の違う上の2群間でその様相に違いがあることや、泊り場を違えたサブグループングパーティーの翌朝の出会いも観察された。

本地域は、屋久島で唯一ヶ所海岸より大規模に照葉樹林が残っている場所であり、ヤクザルの高密度な自然分布がみられ、ニホンザルの主要生息地であった照葉樹林帯での生活を知る上で不可欠な地域であり、シカや鳥類も多数生息する。植物学的にも重要な本地域の森林と動物の保護が十分になされなければならない。

ニホンザル・ハナレオスにおける社会的出会いの構造

菅原 和孝(京大・霊長研)

群れを離れて単独生活をしているニホンザルのオスの間で生起する“稀れな出会い”の構造を分析することを通じて、オスの対他態度の一般的特性を了解することが本研究の主眼である。調査は宮崎県幸島において60日間行なわれた。調査方法は主に個体追跡法を用い、15頭のハナレオス(7歳～11歳)を計148時間にわたって追跡し、その間に生起する相互作用を全て記載した。

今回の調査と1974年度の調査結果(菅原'75)との比較から、次の3点を指摘できる。1) 前回5～6歳であったオス(12頭)の42%が島外に去っていることから、群れ離脱直後のオスは6～7歳にかけて急激な孤立化と生活空間の改変に向かう傾向が強いと言える。2) 一方、より年長のハナレオス(16頭)の87.5%が現在も島内に

生存していたが、その間での出会いの頻度は、前回に比べ減少しており、とくにワカオスからオトナオスへの成長に伴う孤立化が顕著である。3) しかし前回に主要なメールボンドとして指摘された関係のほとんどは維持されており、その恒常性が注目される。

次に、オスどうしの遭遇について論じる。ある相互作用において関与者の役割選択が順位に規定されているものをルーティン、そうでないものを両義的相互作用と呼べば、以下の仮説を得る。1) 2対の遭遇においては、個体間に親和残基がない場合でも、両義的相互作用を通じて近接可能性が実現される。2) 3対の遭遇はルーティンとしての攻撃を実現しやすい。このルーティンは2個体の近接と1個体の疎隔に帰結する傾向がある。3) オスザルの社会的出会いにおいて3対関係はルーティンとして作動し、より隔通性の高い2対関係に帰着することが、一般的特性として抽出できよう。後者は現象的な親和性として観察者に与えられる。

志賀高原、横湯川流域に生息するニホンザルの四季にともなう遊動、個体変動(出産、群の出入り)隣接群との関係などについて

油田よし子

遊動について。横湯川流域に現在A, B₂, C群と名付ける三つの群が生息している。C群の年間を通じた追跡調査を、昭和49年12月から行なっている。50年度の調査

で、春から秋の遊動は食べ物の変化によることがわかった。51年度は、年によっても変化することがわかった。これは、年によって植物の花や結実、豊作と不作があることによると思う。冬期は食べ物の種類は変化のない、木の芽や皮が主である。寒さが厳しく雪降りの多い冬の遊動は、天候に大きく左右される。標高1,300mから1,700mの間で、直線距離1km×1.5km位の狭い場所を利用している。春から夏の間は、標高800mから1,700mの間で、直線距離9km位の間を動くのに比較すると大変なちがいである。51年度は今まで過去3年間使っていた遊動域を少し変えた。この原因は、重要な食べ物であるコシアブラが食べすぎて枯れが多くなったためではないかと思う。

隣接群との関係は、春期、B₂群とC群が一番接近する頃をねらって、好広氏(京大)と同時追跡を行なった。その結果、群と群は互いに強い興味を示し、泊り場を近くにとったり、距離は短いが一緒に遊動したのを確認した。A群の数匹が一回近よって来たのも確認した。このことから群と群はかなりの交流があるのではないかと思うようになって来た。秋期の交尾期も接近するので観察したい。

個体の変動は、51年度出産予定7頭のうち6頭も出産した。このように、近年急に出産が増え出したのは、冬に旅館のゴミや餌をもらうようになったためではないかと思う。B₂, A群よりC群へ入群が見られ、C群より出群した雄も見られた。雄の出入りはひんばんである。

設定課題 2. 霊長類の運動様式に関する研究

霊長類の顎および舌運動様式に関する比較組織学的研究

窪田金次郎・根岸孝康・柵木利昭
(東京医歯大・歯・顎研)

1. 舌運動様式に關与する舌筋構築と筋紡錘分布については、ツバイ、スローロリス、ニホンザル、ヒトの新生児を使用した。頭部の各半側から作成した30ミクロンの連続セロイジン水平および前頭断切片をヘマトキシリン・エオジン染色して観察した。

所見：ツバイの舌の各筋束は比較的に明瞭に分離されとくに、下縦舌筋がよく発達して観察出来る。筋紡錘は外舌筋にも内舌筋にも全く存在しない。スローロリスの舌の各筋束は一般によく明瞭に分離され、とくに上縦舌筋は正中部舌背に局限した線維束として配列している。筋紡錘は左右の頤舌筋にそれぞれ1個ずつ存在した。ニホンザルになると、上縦舌筋の発達は悪く、頤舌筋はよく発達している。筋紡錘は左右の頤舌筋にそれぞれ47個

ずつが、茎突舌筋にはそれぞれ4個ずつが、舌骨舌筋にはそれぞれ5個ずつが分布し、外舌筋に多く分布した。これに対して内舌筋には筋紡錘は少なく、上縦舌筋にそれぞれ3個ずつが、横舌筋にそれぞれ4個ずつが分布した。ヒトになると、舌筋構築は複雑となり、上縦舌筋は舌背部から舌側縁部にかけて、広く分布している。筋紡錘はサルとは逆に、内舌筋に多く分布し、上縦舌筋にそれぞれ159個ずつが、横舌筋にそれぞれ79個ずつが、下縦舌筋に22個ずつが、垂直舌筋に14個ずつが分布した。これに対して、外舌筋には、頤舌筋にそれぞれ115個ずつが、茎突舌筋に75個ずつが、舌骨舌筋に37個ずつが分布した。

このように原始的なサルほど舌は摂餌運動に關与して、舌筋構築が単純で、各筋束の同定は比較的に容易であって、筋紡錘分布もないが、サルの進化につれて、外舌筋に発現する。筋紡錘の数は増加し、ニホンザルでは内舌筋にも現われてくる。この分化の傾向はヒトにおいて最高に分化し、筋紡錘分布は外舌筋<内舌筋となる。